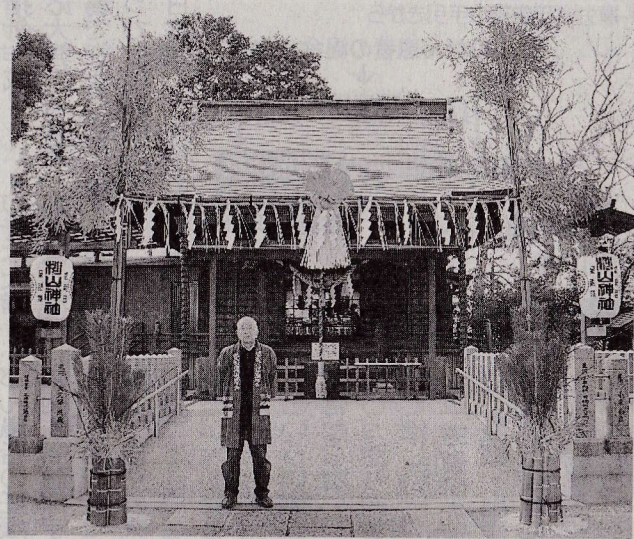


故郷の正月飾りよみがえる

保土ヶ谷 わら細工師、神社に設置



「再現」されたお正月飾り。鳥居のように組んだ竹の根元には梅と松が飾られ、「松竹梅」となっている＝横浜市保土ヶ谷区

故郷・宮城の家庭で戦前まで作られていたという鳥居のようなお正月飾りを、川崎市に住むわら細工師が「再現」した。横浜市保土ヶ谷区の星川杉山神社に飾られており、小正月の行事「どんど焼き」でお焚き上げをする1月14日朝まで、参拝客の目を楽しませる。飾りを作ったのは、宮城県丸森町出身で川崎市在住の荒川美津三さん(88)。飾



荒川美津三さん

りは高さ約3・6段で、鳥居のように組んだ竹も含めて一つの飾りとなっており、荒川さんによると全国的にも珍しい形だという。竹は、同神社の敷地内に生えていたものだ。

荒川さんは仕事で川崎に移り住んだ後も、子どもの頃に覚えた自宅用の小さなしめ飾り作りを続けて来た。定年後には市立日本民家園(多摩区)で、わら細工作りの指導をしている。

今回、故郷の大きな正月飾りを作ろうと思ったきっかけは、しめ飾り研究家の森須磨子さんが全国のお正月飾りを紹介する絵本「しめかざり」を見たこと。広島・宮島がよく似た飾りを見つけ、「なんとか再現したい」という思いが募ったという。

21日、仲間や神社の協力を得て、境内の前に設置した。荒川さんが最後に丸森町でしめ飾りを見たのは13歳の頃。戦争中、大きい飾りを燃やすと火柱が高く上がり、目立ってしまうために作られなくなってきたと覚えている。当時の記憶を頼りに完成させた飾りを見て、「少年時代の思い出がよみがえって感激で涙がこぼれました」。荒川さんは「農村の文化をなくさないようにしたい」と話した。

(佐藤 葉)